『比較民俗研究』11. 1995／3

納西族の民俗宗教に関する諸問題
―道士・サニ・ドンパについて―

丸山　宏※

本稿は,「漢族と周辺諸民族における民俗宗教の比較研究―納西族・イ族と日本民俗宗教の比較民俗学的考察―」という研究課題のもとに，1994年９月10日より10月５日まで，主として中国雲南省麗江納西族自治県において行った現地調査に基づいて書かれた中間報告である。本報告においては，私の専門分野が中国道教史，特に道教の儀礼の歴史的研究であることから，納西族における道教受容の問題を前半に述べた。また後半においては，サニと称される納西族のシャーマンないし巫術師の問題と，さらに納西族の独自の宗教職能者であるドンパについての聞き取り内容と所感をも述べることとした。

本報告は，納西語も解さず，またはじめて納西族の文化に触れたという状況の中で執筆されたものであって,本格的なモノグラフやオリジナルな内容が盛られるようなものではないけれども，しかし現地調査で得られた宗教生活にかかわる聞き取りの内容を整理しながら，考えられる問題点を整理しようと試みるもので，今後の継続的調査のための下敷きとなればと希望している。

一．納西族の道士について

９月17日に，黒龍潭の東巴文化研究所において，解放前まで道士であった王銀斗氏（1917年生，77才）に聞き取りをすることができた。王氏は現在納西族であって，道教本来の用語以外は，すべて納西語で話すので，午前は白庚勝氏（中国社会科学院少数民族文学研究所），午後は現地の楊氏（県外事室）に，納西語から中国語（普通話）への翻訳をしていただいた。

次に聞き取りの内容を整理して提示し，その後で若干の考察を加えたい。

・道士としての家柄について

「もとは自分の家は鶴慶県から来た漢族であったが，納西族になってしまった。」

「先祖は，白族の多い鶴慶県に住んでいた。しかし，納西族の木氏土司の木増(1)という人が，わざわざ道士を麗江に呼び招いた。自分の先祖は軍師にもなったことがある。その当時呼ばれた道士は，一人は白沙に住み，一人は古城の城内に住んだ。」

「自分の祖先の家柄は，張姓であって，張天師の親戚関係である。61代の張天師とも関係があり，また六一代前までの張氏の家譜を持っていた。麗江に来てから，およそ20代を経ている。」

「自分の父親は，張学鵬といい，1953年に80才でなくなった。世襲の道士であった。自分の兄弟も皆な道士だった。」

※東北大学国際文化研究科・言語文化学部助教授

・王道士の略歴

「自分は，33才の時に「奏名」[2]をして，「掌壇」できるようになった。道士としての法名を張教昌という。」この後，王氏は自分の道士としての職位を長く言うことができ，全部を聞き取れなかったが，「霊宝」や「清微」という道教職位特有の用語が出て来るものであった[3]。

「忠義街の出身であり，後に文良村の王姓の家に女婿としてムコ入りをした。女婿となることで，周囲の人からいじめられた。弱いものこそ助けられるという新中国の考え方を知って，解放の時はすぐに党に参加することにした。1948年頃から入党をして，地下党の書記長もやった。もと貧しかったために，逆に強い権力を持つことになり，農会の主席をしたこともある。自分も一人の幹部だったので，それ以降はだから道士として儀礼をやったことは一度もない。」

「道教経典は，自分の家では代々，最多の収集量を誇っていた。しかし，自分は解放後に共産党員になったので，率先して経典を焼いてしまった。特に文化大革命の時に，全部焼いた。」

・麗江地区の道教の種類

「麗江地区には，山の頂上で金丹を煉るような静居道は存在しなかった。家に住み，妻子を持ち儀礼を行なう伙居道が存在したのみである。」

・代表的な道教経典の例

王氏に，現在も覚えている道教経典のさわりについて思い出してもらうと，漢語で次のような文を読みあげた。どんな字かと聞くと，もう耳も目も悪くて自分で字を書いて説明することはできぬと言う。白庚勝氏に字にしていただいた。その字は王氏も確認した。

「道生一気広宣揚　道教流伝得正方
道有五常生五帝　道分三気出三皇
道高龍虎常欽伏　道法乾坤不可量
道徳威儀朝上帝　道場起處放豪光」

という七字句であった[4]。

・解放前に麗江地区で行われた代表的な道教儀礼

「昔行っていた大きな儀礼に龍船を川辺で焼いて災を払う儀礼があった。これは火災・水災・虫災・治病などに使う。1943年に麗江古城の四方街で工場が火災になった時，自分の父親が道士として主催してこの龍船の儀礼を挙行したことがある。儀礼を演ずる巫術師は仮面をつけないが，顔に直接塗料を使ってくまどりを画いて参加する。四方街一帯の家々では一軒ずつ箱を準備して，その中に草履を一足と日常品などを入れて船に積み込むために供出する。この荷は二人の者が棒でかついで集めまわる。厄のついた荷を積んだ船を前にして，道士は法術を使って，船を直接さわらないでも振動させることができる。自分は父親がこのようにして船を動かすのを見たことがある。この龍船の儀礼の時は，一軒ずつ家を廻って駆鬼をして，鬼をおどろかす音を出し，所作をして歩く。船を出してから後に，もう一度町にもどって来てから，あらためて鬼といっしょに驚かせてしまった「家神」を撫めねばらなず，家の神に対して安神儀礼をして歩いた。この家神とは「心到神祇」(思えば神にとどく)というような心で存在を知るだけの神で，特に偶像はない。」

「小さな法事としては，「退撤馬」とか，また結婚式の時に「退白虎科」という儀礼をしていた。」
「その他に，「朝斗会」十天（10日かかる）があった。また自宅で，正月元旦に「張天師」をまつる。その時には，自分の家で持っているすべての道教経典を順番に全部読むという行事がともなった。これを毎年やっていた。」

・喪葬儀礼について

「まず人が死ぬと白布２本を使用する（用途不明）。また必ず泣き女が来る。白紙を顔と体に掛ける。入棺してから，叩頭し，送霊する（告別して出棺することか）のが基本である。みな土葬である。」
「七七斎をやっていた。死後３年を経れば，門聯などに紅い色を使うことができるようになる。七七斎の時には，『度人経』や『血盆経』を誦えた。「過橋」の儀礼もやっていた。」
「葬儀の時に道教で一番えらい神の名前は，「太乙救苦天尊」という。死者の霊は，「東獄酆都」に行く。ここがすなわち天堂である。」
「中元節もやっていた。道教には上元・中元・下元がみなそろっている。「上元天官賜福」というではないか。」

・経典を読む言語についいて

「道教の経典の読み方は，漢文の文言音で，親や先生から小さい時より頭の中に覚えさせられる。例えば「玉皇灯」という儀礼をする時の『皇経』などは，こうして読み方を習ったのである。人によっては発音の仕方だけを頭の中で覚えているから，自分が今何頁までを読み進んでいるのかを分っていない人さえいる。しかし読み方だけはしっかり受け継いでゆくのである。」
「納西語でのみ説明ができるような儀礼の文章や，納西語が混入した白話文の儀礼文献はなかった。また納西族固有の神の名称が道教の経典の中に出て来ることもない。道教について言えば，漢文の文献しかなく，漢族の神しかなかった。」

・ドンパとの関係

「東巴と一緒になって混じり合って一つの儀礼をするということはない。ただ，葬式などでは，ラマ僧もドンパも呼ばれて来て，彼等と並んで，それぞれのやり方で儀礼をすることはあった。」

以上が少ないながら聞き取ることのできた王銀斗氏をめぐる道教の状況についての証言である。分量的には多くはないが，麗江の大研鎮の明代以降より解放直前までのかなり典型的な道教の特色が読み取れると思われる。

まず納西族の中に道教が本格的に導入された時代が明代後期の木増の頃であって，外来の高度な宗教の一つとして漢族の正一派道教も選択され，木氏の出身地であった白沙木都村と古城と二箇処で，土司という支配者の需要に応じるために存在したと見られる。従って一般の納西族民衆層の間には非常に限定された存在でしかなかったであろう。

土司が導入した道教のレベルは，もし事実なら張天師という正一派道教の正統な血統と直接関係がある一族の完全で高いレベルの道教であった。この張一族は，20代を経過する中で民族としては納西族化してしまうが，世襲体制を守って漢族の道教という宗教技術を，内容を変容させな

いで保存して伝えて来たようである。そしてこのことを有力な上層の納西族から期待されると同時に，自らの存在理由ないし誇りともして来たと思われる。

王氏の記憶にある道教儀礼はおそらく民国時代末期の古城地区の一部の漢化のよく進行した街区でおこなわれたもので，台湾の王爺醮によく似た，災厄を船に乗せて川岸で焼いて送りだす儀礼が街区全体で挙行された。葬礼の際にすべて土葬であると言っているのも，このような道教が十分に漢化された納西族に使われていたことを示す。『度人経』や『血盆経』を斎の時に読むのは，台湾の道教と同じである。

特に注目したいのは，張姓のこの道教の家で正月元旦に道士の祖師であり，かつ自分の家の初代の先祖でもある「張天師」を祭祀し，同時に，所蔵していたすべての道教経典を頭から全部一回読みなおしてみる行事をしていたことである。これは，経典の読み方を忘却しないために役立つ儀礼でもあったと考えられる。民族として納西族化し，また日常生活の言語として納西語を常用するようになる中で，このような行事を継続したことは大変興味深いことと思われる。さらに，王氏からの聞き取りでは，納西語が経典に混入されておらず，納西固有の神の名が漢字で音をあてられて経典に混入されてもいなかったという。従ってこの家で行われた道教は，その内容が納西化されないことによって，むしろ土司や上層の人々，さらに街区の漢化された習俗を持つ納西族民衆に好まれてきたと考えられる。

音楽として残存した洞経会の活動に復興が見られるけれども，大きな儀礼をともなう道教の伝統はまったく復興の兆が見えないのが現実である。他の漢族地区，例えば浙江や福建では80年代後半に道教儀礼が再活生化したが，麗江地区はそうなっていないのは，何故だろうか。儀礼を復活するに足る経済繁栄の欠如だけが理由ではないと思われる。

以上は，納西族の道教の道士の一つの存在様態を示したに過ぎない。この他の道士の家が別の存在の仕方をしていた可能性もあるであろう[(5)]。さらに道教の部分的な要素である護符の利用[(6)]，もう少し範囲を拡げて中国的宇宙論の中の陰陽五行のシンボリズムの援用[(7)]などが具体的にどのように発生し，かつ行われたかという問題がある。これらの問題は個別要素の受容という次元の問題で，まとまった儀礼体系を受容する問題とはやや異なると思われる。

街区または盆地内の漢化された農村における漢族の民間信仰ないし道教の神々の廟の分布と機能も注目に値する[(8)]。

二．納西族のサニについて

9月24日に良美村においてサニ[(9)]についての聞き取りをすることが出来た。その内容は大変に興味深い，重要であると思われるので以下に紹介する。話者は和丕勛（58才），和耀庭（63才），和文華（62才）。

・蠱毒について

「嫁選びをする時どんな基準があるかというと，(1)自分の息子の嫁として，父の姉または妹の娘から選ぶ。(2)美しい容姿か。(3)蠱毒と関係していないか。(4)天花などの流行病にかかっていない

か。」
「蠱毒は，女がこれをすることが多い。仇があるから。青蛇・鴿・ガマ・蝴蝶の蠱がある。自分が害を加えようとする相手が食べる時に中に毒を盛る。これに害されると薬では治らない。そこでサニを呼んで来て，牛角を使って被害者から血を抜き取り，その血を水の入った器の中に入れて，血の形状をよく見て，原因をつかんで対処する。」
・サニの特色
「女性のサニが多い。この村にもいたことがある。五方の神を呼べる。」
「男のサニがやっていたのは，農具の鍬を赤く焼いて，直接歯でそれをかんでも口をやけどすることがない。神符も書くし，口から水を吹いたりもする。白族のサニもいて，32段の刀梯を登ったと聞いた。」
「サニの生活は普通の人と同じで，子供もいる。しかしサニは一種の天才で，突然ある日歌いながら踊り始めた。そして古城の城隍廟に行って，そこで儀式をやって，紅巾を頭にしめて，自分が正式にサニになったことを他の人たちに知らせる。」
「サニは，道具として大刀と銅鑼を持っている。紅い衣を着て，ベルトも紅い。はだしである。女のサニは前掛けをする。サニは紅巾を動物の角のように突起を作って角が出ているようにして頭にまく。」
・良美村にいたサニの活動状況
以下は和丕勛氏（58才）の語ったところによる。
「村にいたサニのうち，自分が子どもの頃見たことがあるのは次のようだった。このサニの家の棹上に奇妙なものがあった。ニワトリの卵に人の顔が描いてあって，それを下と上から二箇の茶碗でかぶせてある。これをつついて，上の茶碗をあけて，中の卵を少し動かすと卵の神サマがサニの身に憑くのである。この卵の神サマは名前がない。というより，村人はみな何の神サマなのか知らない。そしてサニが儀礼を終了すると，また茶碗の中の卵に神サマをかえす。このサニは，毎月の初一と十五の日に，ニワトリの血を滴らせてこの神サマをまつっていた。もしも，しろうとや子どもがサニの目を盗んでこの茶碗をいたずらすると，その人は病気になってしまう。そうなればドンパを呼んで来て治すしかない。」
・サニとドンパの関係
「サニというのはドンパと兄弟のようなものである。ある時には，ドンパもサニである。実際に昔，この村で，一つの家族の中からドンパもサニも出した場合があった。」
・サニに関する物語り
「ある時，官府の役人が一人の気に入った娘を嫁にしようと婚約した。ところが，サニが役人に対して，「その娘の家では蠱を養っている」と主張した。そこで役人は結婚をサニの言葉で妨害されると思って怒り，そのサニを捕えに来ることになった。サニは，自分の力では，はっきりとどういう種類の蠱かわからなかったので大変にあせったが，いよいよ逮捕されるという前の晩に，そのサニの夢の中に，先に亡くなった母親が白衣を来てあらわれて，次のように言った。「息子よ，

こわがるな。その娘の家ではハトの蠱を養っている。木箱の中にいる。二羽のハトがいるはずだ。」と。果して調べるとその通りであった。サニが二羽のはとに熱湯をかけると，ハトが消えた。するとすぐに，その娘のおばあさんが死んだ。」

以上がサニについて得られた内容である。まずサニが対人関係の怨みをはらすために使用された蠱毒に関与しており，それに害された人を治療できると考えられていた点が注目される。牛角で血を吸引して，水に入れて何の動物の形状を取るかを観察し，動物を特定することで毒の原因を探り出したようである。蠱毒の原因の解明と治療に関しては，サニの物語の中にも語られている。納西族のサニが，怨みをはらすという人間関係の暗い部分から生ずる現象に深く関与していたことがわかる。

サニは，道士やラマ僧，ドンパと異なる面を持つ。それは彼（女）が，神に憑依されることを本質としている点であり，良美村の村人も，このことをよく覚えていると言える。サニは，ドンパよりもいっそう納西族本来の宗教だけを担当する者であるかのように考えるのは問題がある。少なくとも麗江盆地では，サニのイニシエーション完了の儀礼は，古城の城隍廟で行われていたと知られる。となると，ここでの漢族の民間に普遍的にまつられる城隍神とサニの結びつきは何を意味するかを考える必要がある。一つの見方としては，漢族の中においては，城隍神はその地域一帯の人びとが悪事を行うと使者（無常神など）を出して懲罰したり，死人が出るとまず城隍神の前に連行されるなど，その地域の宗教的次元での治安を総括しているイメージが強い。従って蠱毒という犯罪を解決するサニが城隍神の機能と結びつけられる可能性は全くないわけではないのである。これは一つの私見にすぎないが，もしこのように考えられるとすると，サニに憑依するような民間の末端の納西族の神々と，古城の漢族の城隍神とは，一つの系統化された協力関係にあることになるであろう。これは，清代の雍正元年（1723）の改土帰流以降の，麗江地区における中央から来る官と，現地の治安担当の胥吏との協力関係という現実とパラレルな事象でもある。このあたりにも納西族固有の神と漢族の神の交渉関係の一つの局面が顕在化しているように見える[10]。

なお台湾の紅頭法師をはじめとする漢族の巫術師や，華南諸民族の巫術師とこのサニとは，裸足で紅巾をまき，銅鑼のみの伴奏で，主として一人で法事をし，時に自身に神を憑依させるなどの多くの点で共通する属性を持っていることは間違いない。

三．納西族のドンパについて

・9月16日，東巴文化研究所における座談会においての聞き取り。主に和士誠氏（83才），和開祥氏（73才），和即貴氏（70才）の三人のドンパより。

「この研究所では，1981年5月からドンパ経の現代中国語訳を中心とした作業をしていて，既に主要な経典のすべてを終了し，出版予定である。」

「ドンパ文化は麗江の町からなくなったので，この研究所のスタッフも，いまだになおドンパ文化が残っている山地や交通不便な避地まで行って調査をする。[11]」

「ドンパ教には最高神はいない。ただ儀礼ごとに神の順序はある。」
「教祖のディンパシロは，チベット出身ではないかと言うけれども，しかしドンパの立場から言えば，彼は天空から降りて来たのであって，彼がいかなる民族であるかは問題ではない。ディンパシロは何族でもない。」

9月19日，北岳（サンド）廟において，管廟（廟守り）をしている楊作慎氏（81才）と楊汝坤氏（70才）の二人より。

「ドンパはドンパで2月8日のサンド神の祭日にこの廟にまつりに来る。しかし，われわれ管廟のものがとりしきる祭祀と，ドンパのまつり方とはごく一部分しか重なることがない。」

9月20日，白沙郷東文村において和献筆氏（72才）より。

「この村では，人の死後の七七斎は，ラマ僧もダバ（達巴）も道士も呼ばずに，自分たちだけでやる。」

9月22日，大来村において和象武氏（64才）より。

「ドンパは，この村から1960年代にはいなくなった。解放直後の50年代にはまだいたのだが。」

同村の和福寛氏（72才）と和恵友氏（73才）による。

「この村で以前に殉情（イョポ）があって，二組の男女がいっしょに心中しようとしたら，男二人は約束の時間に来なかったので，女が二人だけで死んでしまった。その時，ドンパが来て祭風の儀式をしたことがある。」

同村の和興慶氏（30才）によると，

「この村で，昔，鬼体（生きている人に死者の霊がとりつき，ナシ語のみならず漢語やチベット語などで，自分のことをしゃべる）の一人が，ドンパをなぐったことがある。恐れたドンパは儀礼をやらずに帰ってしまった。」

9月25日文峰ラマ寺において，活仏の登嘉法師（35才）より。

「自分は中甸県三坝の出身で，父親は習阿牛といい，大ドンパであった。しかし，私は，16才の頃に思うところあって，自悟して，四川の巴塘県のラマ寺に入って勉強した。」

以上は，断片的であるが，納西族の宗教生活中のドンパの位置づけをする時に考慮の材料となるであろう。

次に，海抜3100メートルの山区にある汝寒坪村（ルハバ村とは青草坪のこと）において9月26日にドンパの和国柱氏（60才）から聞いた内容を示す。

「この村にはドンパが七人いる。また自分の曾祖父の阿普生は，1856年の回族の杜文秀起義の時に，杜の軍と勇敢に戦った。祖父の阿普宝は大ドンパだった。父の阿普才もドンパであった。自分（阿普寿）もドンパである。息子の和永強（阿先）もドンパである。」

「若いドンパに，まず先に教えるのは踊り方である。次に経書を覚えさせる。自分一代で，ドンパの伝統が絶えないように是非息子につがせたいと思う。」

「ドンパ教の経書は自分の家には，以前は背負い篭一つにいっぱいになるほどあったが，今は一冊もなくなった。一つには文化大革命の四旧をなくす運動で，生産大隊ぐるみで大隊の中で焼

いた。それから，一つには少し残っていた経書を，騙されて安く買い取られてしまった経験もある。」

「解放前に，この村ではドンパは，祭天，祭風，祭朮（龍蛇）をやっていたが，もう今はなくなってしまった。ドンパが今でもやる儀礼は多くはないが，結婚儀礼，生誕儀礼，起名（名づけ），求福（災をはらう），超度などがある。もし非常死の人が出たならば，経書はなくなったけれども，今でも，口だけで祭風することは可能である。」

「結婚の儀礼では，新郎と新婦は，神柱（ムトゥデュ，天を支える柱であり家神を代表する。一年に一回収穫の時に初穂を天柱飯として供える）のそばに跪坐し，ドンパは神柱のわきに立って，二人に『素樹（スジュ）経』を読み聞かせる。新婦の眉間に糯麺とバターをこすりつけ，銅製の杓子をわたす。」

「新しいいろり（グクロ）に，はじめて火を入れる時は，いろりの中心に銀と銅銭を置いてから，ドンパが『祭灶経』を読む。いろりは，土煞の衝冲をさけて，すばやく一日以内で完成させ，火入れをしてからは，いろりの火は三日間以上消しておくことはよくない。消えると，その家の人は長生きできない。」

「この村では，楊姓の人は火葬するが，和姓の人は土葬する。葬儀のやり方は次のようである。以下は和姓の場合である。

①病人を見守ってやる。②死に臨んで，含口をする。茶，銀，米などを口に入れてやる。男は九包，女は七包だが，実際は口には三包だけ入れて，残りは下着の中に入れる。③土罐と鶏を用意する。④死者の顔を洗って，体に悪いものが入らぬよう鼻や耳などに栓をする。黒布，鶏毛，バターを使う。⑤停屍の期間や，入棺出棺の時間を，占トの方法に従って計算する。干支の上で狗，馬，虎などが相合するかよくしらべて，よい日をさがせない時は一ヶ月ぐらい停屍する。⑥報喪は，親属の人，特に孝男の母方の舅に依頼して，死者のあったことを，海螺を吹いて報じてもらう。喪事に参加する時は，みだりに人の家に宿泊してはいけない。また一杯の飯，一箇の卵，四塊の肉，一本の酒，一本の香を持参する。⑦発霊をする。この時の供え物は，被面（ふとん類）一つ，娘や女性は花圈（はなわ）一つ，近親者は五殼を五盒と酒一本，たばこ一本，鶏と豚肉一塊，銭50元などである。ドンパの儀礼への報酬は，米二升，酒一升，肉一塊，鶏一羽，銭８元である。この告別式には700人も集まる例があった。⑧発霊の前夜には，引路（死者が祖先の国へ帰る案内，この村では，汝寒坪→龍泉村→白沙村→ずっと北の方角へと順に送ってやる）をする。その時に灯火舞いをおどる。ドンパは『灯火経』を読む。死者が冥界の暗い世界に行くのに，この灯火だけは見ることができるから，明るくしてやる。霊前には花13本，栢の木13本，灯火13本を供える。昔はドンパが多く来てこれをやったが，今は一人か二人である。

⑨棺を墓まで運ぶ。女性もかつぎたがる人がある。この時に送霊の歌をみなでうたう。歌詞（の内容の一部）は次のようである。送你的有幾百人，接你的有幾千人。你祖先都会接你，迎接你的是祖先。（あなたを送ってあげる人は何百人もいるけれど，あなたを迎えてくれる人は何千人もいる。あなたの祖先はみなきっとあなたを迎えてくれる，つまりあなたを迎えてくれるのは祖先

たちなのだ。）⑩墓穴に水と銭を入れた碗を置き灯を供えて，棺を一度，椅子の上におろしてから穴中に入れる。帛や旛は焼いた灰にして穴に入れる。土を棺にかけるのは，男の死者にはまず９回かけ，女だったら７回である。⑪次の日に，少数の親族だけで墓にもどって検査をする。」「死後の超度については，死後に一年斎をする。遺族が自宅の中庭で自分たちでやる。その時に白布と紙製の人形を使用する。この超度は，これをすると死者が祖先になれるので，紅事（おめでたい行事）なのである。誰に対してもやれるわけではなくて，死者が50才代より若ければできない。60才以上で死んだ者ができる。また男の子がなかった人はできない。」

「普通は三年を経たら祖先になると考えるが，この村では１年で祖先に対する週間がある。以前は超度の時は跳東巴をし，実際に馬にのって，30頭ぐらいの馬で競馬のようにしてやった。」

９月27日に汝寒坪において，近接する汝南化村から来たドンパの和士興氏（68才）より聞き取ったのは以下の内容である。

「自分の家は８代ドンパである。今は11才になる孫を儀礼の時に連れて歩いて教えている。日常よく行う儀礼で比較的に多いのは，超度である。自分一人の時もあるし，ドンパ仲間四，五人でやることが多い。比較的に少い儀礼は，子供に名前をつける起名（母方の親属が準備した名前の一つを貝で作った占具で決める。長男の起名儀礼にはサンド神と，白族である第二婦人を祭って加護を祈る）や，鬼払い（これは特に親戚の家からひそかに依頼されて無報酬でやってやることが多い）がある。祭典や祭風は，解放後にやったことがない。神鵬や丁巴什羅（ディンパシロ）を祭ることは，自分が七，八才の頃に祖父がやっているのを見たことがあるだけで，やり方を知らない。」

「経典については，文化大革命の時に，自分も幹部だったので焼いた。しかし今，他の人の所蔵していた本を写させてもらった経典を一冊持っている。それは葬式の時，屍を棺に入れる際に除穢のために読むものである。」

「治病儀礼は，土薬（地方的伝統的薬）も使う。自分は小児科と婦人科の方面なら少し看ることができる。女性が難産の時に，サニを呼んで儀礼をする人もいる。出産が少なくて子供に恵まれない場合に白虎を追い払う儀礼がある。」

「汝南村では，１年に３回，２月８日，６月１日，11月１日に祖先を祭る。清明節に墓に行く人もいる。」

「火葬，火化ということをすると祖先になることができる。最近では，火葬の場合に，棺に入れた屍体を家の中に置いている時に，既に発霊の段階で超度をやって祖先にしてしまう。神路図というものは，以前に使っていたことがある。これは超度の時に，棺から大門口のところまで広げて使う。神路図も焼いてしまったので，以前とまったく同じように死者に対して詳しく引路することは困難になってしまった。」

「ドンパは，儀礼をしても報酬は大変に少ない。しかもそれを儀礼に加わった多くのドンパで均等に分配することになってる。だから自分の家族を養ってゆくためには，農業もやらねばらない。いくら大ドンパであっても，必ず農業を兼業している。」

以上に示した和国柱氏と和士興氏からの聞き取りは，短時間でなされたものであり，調査者の側にも不十分な用意しかなかったので，ここにはできるだけ聞き取れたままに列べてみた。ドンパ自身が直接語ってくれた内容として充分に貴重なものであり，今後の継続的調査のための基礎資料としたいと思う。（1995年３月17日稿）

〈註〉

(1) 木増は，1622年から1637年まで土司の位にあり，明代後半期において江南方面から漢族の道士・和尚・儒者・医師・技術者などを麗江に招き，自ら漢文の詩文集まで作った。李霖燦『魔些研究論文集』（台湾，国立故宮博物院出版，1984年）193頁参照。

(2) この奏名は，奏職とも呼ばれ，道士が儀礼を主催することができる職位を三清などの高位の道教神に報告して認められる形式をとる。正一派の道士はこれを行わなければ道士長となれない。現在の台湾の正一派でも奏職は行われていて，年齢が30代後半になってやっと行なう場合が通常である。

(3) 「霊宝」は職名のうち法位の高さを示し，「清微」は道法の法術の系統を示す。南宋から元の頃に，このような用語を含む職位が確立し，明代に定着していったと考えられる。例えば，『道法会元』（明代に成立）巻249，太上天壇玉格を参照。

(4) この経文は，麗江地区の文昌帝君の聖誕を祝う洞経会の中で，誦えられる『開壇経』の一部分とほぼ一致する。雷宏安「麗江洞経会調査（上）」（『宗教学研究』1989－３・４期，四川大学宗教研究所），48頁参照。

(5) 例えば道士の家の者が，東巴の家と血縁関係に入り，相互の技法を交流させる事態も想定され得る。

(6) ９月23日，金山郷大来村で和興慶氏（30才）からの聞き取りによると，「鬼を避けるためのお符がある。太上老君斬妖符という。二枚書いて一枚は焼き，一枚は鬼体（死霊のとりついた人）に飲ませると効く。このお符は，自分の曾爺父が伝えて来たもので，この人は四川省の人であり，謝姓であったが，婿としてやって来た上門人だった。」という。この場合の道教的な護符は，四川省から婿入りして来た漢族が持って来たものである。

(7) 最も典型的なのは東巴経典の中の占トに関する記述に五行説が見られることである。例えば，『布杷過書』（求取東巴巫師人経記）などには東方・甲乙・木などの象徴の組み合わせがそのまま出て来る。和志武（編訳），和芳・和牛恒（読経）『納西族東巴経選訳』（雲南省社会科学院東巴文化研究室　1983年）

(8) 古城の玄天閣（玄天上帝），龍泉村の三聖宮（皮匠祖師の孫臏），大来村の山神廟，奎心閣，竜王廟。古城の東山（東獄）廟。古城の生子娘々廟。古城の城隍廟。良美村の村子廟（サンド・観音・文昌），山神廟，馬王廟。余楽村の財神廟，魁神廟，観音廟，奎林寺（観音，玄天上帝，文昌，娘々）などの漢族の民間の神を祀る廟の名が調査中に知られた。

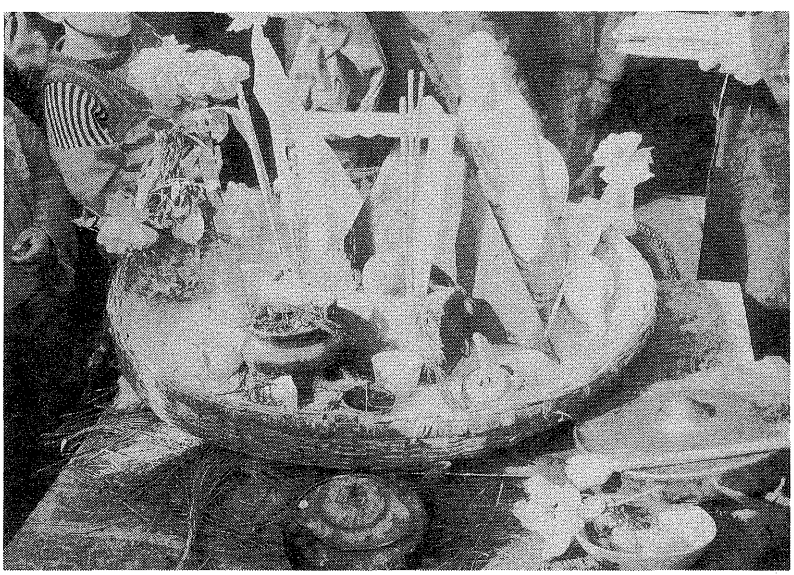
(9) ドンパに比べてサニの研究は少ない。専論として，楊福泉「論納西族巫師“桑尼”」（『雲南

民族学院学報』，1990年１期）がある。

(10) このような関係はおそらく古城に近い農村のサニのみが持ったものであり，山区のサニは別に考える必要がある。

(11) 報告書の一つとして，雲南省社会科学院東巴研究室（編）『滇川納西族地区　民俗和宗教調査』（1990年）がある。

“東巴舞”
汝寒坪村にて
‘94/9/26



“東巴舞”における祭壇